



《山雨染衣図》重要文化財（11/3～19 展示）

Topics

「浦上玉堂」展

美術館ボランティアが選ぶ 千葉市美術館コレクション展

サトウ画廊 1955-1981 ～若く、熱い日々～

特集展示：草間彌生・荒川修作・篠原有司男

Wi-CAN ウィーク開催のお知らせ



《東雲飾雪図》川端康成記念会蔵 国宝（11/21～12/3 展示）



《鼓琴余事帖》より〈風高雁斜図〉重要文化財



《如意道人蒐集書画帖》より〈奇峰連聳図〉
出光美術館蔵（11/21～12/3 展示）

浦上玉堂

Urakami Gyokudo

11月3日、千葉市美術館の開館12年目に入るちょうどその記念日に、ついに浦上玉堂展がオープンします。この展覧会、浦上玉堂が生を享けたまさにその地に建ち、地元として長年玉堂の研究を続けてきた岡山県立美術館との共同企画になるもので、関東では昭和45年の日本橋三越での浦上玉堂展以来35年ぶりの開催です。過去の展覧会はいずれも70点程度の出品数でしたが、今回は多くの新出作品や関連資料も含めて総出品数237点となりましたので3倍以上という大規模な展覧会となりました。浦上玉堂その人については館長からの紹介がありますので、ここでは担当として皆様へのお誘いを記したいと思います。

展覧会は、はじめに玉堂の69歳の時の肖像画からご覧いただきます。息子の春琴が父の七十歳を祝して描いた肖像で、白髪を頭上高く結び、白い頬ひげをたくわえ、隠者の着る鶴氅衣^{かくしやうい}に身を包んで、膝に七絃琴を抱えて弾いています。端正な顔貌で、穏やかに微笑んでいるのですが、作品を間近にして見るとその笑顔には少々驚くほどです。今回初めて公開される《平安第一楼会集図》は、同じ文化10年（1813）に京都の東山第一楼で行われた雅会の様子をやはり春琴が描いたものですが、ここにも玉堂の弾琴の姿がとても和やかな表情で描かれています。“孤高の画家”というような売り文句からイメージされる玉堂もよいですが、息子春琴にこのようにとらえられた父玉堂なのかと思うと、幸福な気分になってきます。

玉堂自身は職業画家として絵を描くつもりはなく、酒に酔って描いた、酒をくれるというから描いたのだというポーズをとり、

誰のスタイルともわからぬような自由な形の山水画を繰り返して描いて、徹底してプロの画家として見られることを否定したのでした。それだけに、個人的な限定的なしかし熱烈な受け止め方をされ、それが現代までの作品所蔵状況にも表れているようです。浦上玉堂の作品を所蔵している公立美術館は数えるほどしかありませんし、旧大名コレクションとか、寺社に伝えられてきたという由来の作品などもあまり見受けられません。本展の出品作品の借用先は53箇所のにほり、本当に多くの方々のご協力を賜りましたが、その多くが個人のご所蔵家なのです。旧蔵者の中には、橋本閑雪、富岡鉄斎、梅原龍三郎、熊谷守一といった画家たちも名を連ねています。国宝の《東雲飾雪図》が文豪川端康成の遺愛品であることは有名ですが、本展出品の《山邨読書図》や《山廻路転図屏風》などもそうでした。展覧会という場ではそれらが一堂に会して壮観なものとはなりますが、本当はいずれも個人で一点一点が大切に鑑賞され、見ても見ても見飽きないという思い、紙背にまで透ると評された玉堂の筆のごとく、それこそ紙背に突き通るまでの視線を受け止めてきたものたちなのです。その場を想像し、自分にとっての1点というものを採りつつご覧いただければまた味わいも変わってくるに違いありません。

そうして作品に直面すれば、紙の上を滑り、擦り、はねたり踊ったり、往復を繰り返す筆の動きがすぐそばに感じられるでしょう。そして遊びのような筆の運びの中から、揺れ動くような風景が姿を現し、移りゆく季節や天候の印象、山中の深い色彩が紙上から湧きあがってくる瞬間に立ち合うことができるでしょう。

音を絵にした山水画家

浦上玉堂は、江戸時代後期の音楽家であり、詩人であり、書家であり、そして何よりもすぐれて独創的な水墨画家でした。

備前国（今の岡山県の南東部）岡山の城下に生まれ、池田藩の支藩鴨方藩の藩士として生まれながら、数え年50歳で脱藩し、二人の息子の手を引いて故郷を離れました。安定した生活の基盤を切り捨て、代わりに得た自由を満喫しつつ、諸国を放浪しました。晩年は京都に定住し、当時としては高齢の76歳でこの世を去っています。

七絃琴という中国風の琴を弾く演奏家として、本人は琴士を自称していましたが、そのほかに漢詩を作り、個性的な書や絵をかく、多才の人でした。しかしながら、いずれの分野でもその道の専門家、プロと見なされることを、きっぱりと拒絶していました。世間の評価を期待することなく、自分の好む表現に徹するという、実行することの難しい道を、貫き通した人でした。

その山水画は一風変わったもので、音楽的ともいってよい律動的な筆致で描かれた画面には、つねに自然の「気」が満ちあふれ、いきいきと躍動しています。そしてよく見ると、山中の細い道や橋の上を歩く人、清らかな川に釣り糸を垂れている人など、画家の分身と思われる小さな人影がきつと目に入ることでしょう。私たち絵を見る者は、その画中人物に誘われて、いつのまにかこの世ならぬ別天地に遊ぶところよさを味わっているのです。

それぞれの絵には、ほとんどの場合、「尋山訪水（山を尋ね水をおとなう）」とか「野橋可立（野の橋に立つべし）」とかの四文字の題が付けられています。テーマを掲げたそれら四文字の題をよく味わってから絵を鑑賞していただくと、より楽しくなることでしょう。そして、谷川の水音、木々の枝や葉を通り抜けていく風の音に心の耳を傾けてください。「音を絵にした」玉堂画の真髄に触れていただけることでしょう。

おそらくは、いつの時代に身を置いてもその輝きを失わないであろうこの美の巨人浦上玉堂の、生涯の画業総体を紹介し、併せてその人となりを偲ぼうとする大規模な回顧展（私の長年の夢でした）を、このたびようやく実現することが出来ました。自我の確立に自信を失い、自己の主張に逡巡させられがちな現代にあって、浦上玉堂の生き方、在り方を振り返り、仰ぎ見ることは、意義のあることと信じています。この機会に、日本にあっては稀な独立独歩の自由人浦上玉堂が、改めて再評価されれば幸いです。

（館長 小林忠）

多くの作品に墨だけでなくほんのわずかに色が挿されていることが今回よくわかりましたが（これまでのデータを多数書き換えました）、そんなことも含め、本当に作品を間近にしなければ見えない、抱けないこの感じを是非会場で味わっていただきたいと思います。

会場では、岡山在住時代を中心とした画業の模索期、50～60歳代の画業展開期、そして晩年の作品群を紹介、さらに、独特の書、珠玉の画帖たち、圧倒される大作の数々や、郭中画という玉堂に特異な形式などを紹介するほか、玉堂が愛した七絃琴に焦点をあてたコーナーを設けます。琴士であることを誇りとしていた玉堂ですが、彼は演奏しただけでなく、『玉堂琴譜』の刊行もした作・編曲家であり、多くの七絃琴を自ら制作した江戸時代きっての多作家でもありました。本展では確認した七張の玉堂製七絃琴を揃え、コンサートも開催します。絹の絃を指の腹や爪で弾く小さな七絃琴は、本来はそう大きな響きが出る楽器ではありませんが、小さな空間を数人と共有して耳を傾け、指が絃をこするかすかな音なども含めて味わう風雅、文人への憧れという世界が実感されることでしょう。どうぞご期待ください。

本展では作品保護のため展示替えを行います。（11月20日（月）は玉堂展会場は閉室します。）以前好評だったリピーター割引を本展でもいたしますので、短い会期ですが一度といわず展示替え後も再び足をお運びいただけますようお願いしております。

（当館学芸員 松尾知子）

□ 七絃琴のコンサート「浦上玉堂余響～『玉堂琴譜』を中心に～」

11月12日（日）／14:00より／1階さや堂ホールにて

演奏：坂田進一（琴士／作・編曲家）

定員150名／無料（入場の際は、展覧会のチケットの半券が必要です）

《申込方法》

座席予約券の申込は、往復はがき（住所、氏名、電話番号を明記、1枚1名様まで）にて。11月6日（月）消印有効。申込多数の場合は抽選。（小・中学生は観覧無料につき入場券は不要ですが、座席の予約には、申し込みが必要です。）

□ シンポジウム「浦上玉堂再考」

11月11日（土）／14:00～17:00／11階講堂にて

司会・コメンテーター：小川裕充（東京大学教授）

パネラー：佐藤康宏（東京大学教授）「浦上玉堂—山水画のフリースタイル」

小林忠（千葉市美術館館長）「浦上玉堂の四字題について」

美術史学会東支部大会。当日席に余裕があれば、一般の方も聴講できます。

□ 講演会「浦上玉堂の生涯」

11月23日（木・祝）／14:00より／11階講堂にて

講師：守安収（岡山県立美術館学芸課長）

先着150名／聴講無料



〈七絃琴〉正宗文庫蔵

浦上玉堂展

2006年11月3日（金・祝）—12月3日（日）

10:00—18:00（金曜日・土曜日は20:00まで）

*入場受付は閉館の30分前まで

〔休館日〕 11月6日（月）

11月20日（月）は展示替のため7階は休室

〔観覧料〕 一般 1,000（800）円

高校・大学生 700（560）円

小・中学生 無料

*（ ）内は団体30人以上の料金

*会期中リピーター割引があります

（入場券の半券提示で2回目の観覧料が半額）

*ワンドリンクつきチケットも販売（一般1,500円）

美術館ボランティアが選ぶ 千葉市美術館コレクション展

10/17 火 — 12/3 日

10月17日より開催中の「美術館ボランティアが選ぶ 千葉市美術館コレクション展」。準備はいかにして進めてきたかを各班それぞれの感想のかたちでご紹介します。私たちの気持ちを読み取って頂ければ幸いです

1. 展示班

日頃「完成された」展示をみているので、自分たちで「作品陳列プラン」を考える作業は思った以上にわからないことが多かったというのが実感です。縮尺図面を前に作品をイメージしながらスペースにはめていく時、千葉市民の財産である作品を大切に思うところから始めました。江戸時代から現代にわたる様々なジャンルの作品をお客様に楽しんでいただけるように、選んだ私たちの思い入れを表現できるように、また展示室の物理的な条件に合うように配慮したため、調整の難しいものとなりました。担当学芸員氏にも助言いただき何とか図面上では配置できたのですが、展示会場でどんな風景をみせてくれるのか予想できませんでした。展示会場でお客様の反応が楽しみでも不安でもあり、ドキドキの毎日です。

2. 目録班

私たちは、お客様の手引きと作品目録が記してある〈リーフレット〉の担当です。頁数を決め、掲載内容を検討する→図版は出品作品の半数28点とし、ボランティアの手による作品推薦文を添える→作品ごとに執筆ボランティアを決め、依頼する→表紙デザインを募る→目録は分野別とし、観覧の便の為に展示No.を付記する→割り付けをする、という手順で進みました。

推薦文では、字数制限で作品へのあふれる思いを削ることが心苦しい限りでしたが、皆の協力で締め切り日に原稿がほぼ揃ったのはうれしいことでした。表紙画は、ボランティア総力結集の展示会であることを明るい多色モザイクで表現した、アマチュア画家ボランティアによる創作です。割り付けは一番難しい作業でした。希望する割り付け案をプロに伝え、出来上るのを待ちました。



長谷川潔《水浴の少女と魚》1925年



菅井汲《歓喜 (YOROKOBI)》1959年

3. 関連事業班

私たちは、お客様に展覧会を楽しんでいただくために何ができるかを追求しました。その一つは、お客様が「私ならこの作品が一番好きだわ」というような見方で楽しんでいただくことです。クイズを取り入れることで、より興味を持って鑑賞していただけるのではないかと考えて、〈お客様による人気投票とクイズ〉を行いました。

他には、展示会場に写楽の傑作《三代目大谷鬼次の江戸兵衛》の立看板や、ボランティアによる投票が多かったにもかかわらず他の美術館への貸出しなどで展示できなかった作品のパネルを加えることで、華やかで充実した展示を行います。

4. 広報班

準備開始に先立ち、「実現したい展覧会像とは」、「展覧会で何を訴えるのか」、「どのように展覧会を広報するか」についてボランティア内で意見を募り、集まった様々なアイデアを展覧会やPR印刷物に生かしました。実際の活動では、〈美術館ニュース39号予告記事〉の執筆、〈報道資料〉、〈ポスター〉、〈チラシ〉の制作に追われ続けました。私たち素人がそれぞれ報道・企画・印刷などの特技を生かし、仕上げはプロの学芸員殿に「画竜点睛」をいただきました。展覧会開幕までの残り1ヶ月間は、ボランティア展のPRに協力しました。皆様、ボランティア展のチラシを見たらどうぞお持ち下さい。

美術館ボランティアが選ぶ 千葉市美術館コレクション展

2006年10月17日(火) — 12月3日(日)
10:00 — 18:00 (金曜日・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 11月6日(月)

[観覧料]	一般	200 (160) 円
	高校・大学生	150 (120) 円
	小・中 学 生	無料

* () 内は団体30人以上の料金

*「浦上玉堂展」のチケットをお持ちの方は無料



サトウ画廊について

千葉市は平成3年度に、東京にお住まいの佐藤友太郎氏から美術品407点の寄贈を受けた。氏は画材店「サトウ画材」を開く一方で、1955年から81年にかけて銀座で「サトウ画廊」を経営しておられた。御寄贈いただいた作品の多くはこの画廊で発表されたものである。

1955年の春、新たに画材店を開こうとした佐藤氏は候補地となった銀座西7丁目の物件を見たが、そこは二階（木造三階建ての）で、店舗としては不向きだった。しかし画家で友人の馬場彬（1932-2000）の提案を受け、その場所で画廊を開くことを決めた。この年に東京芸術大学を卒業したばかりだった馬場は、佐藤氏から画廊の運営を託され、当時新進の美術批評家たちをも巻き込んで、画廊を若く・新しい美術を発表できる場にするべく環境を整えた。1955年4月1日に井上長三郎（1906-95）が所蔵する鬚光（1907-46）の遺作展で始まったサトウ画廊は、その2週間後には岡本太郎（1911-96）が代表を務めるアート・クラブのメンバーたちのグループ展を連続して開催した。展覧会ばかりではなく、55年10月から「サトウ画廊月報」を発行（68年7・8月の合併号まで136号にわたる）し、文字通り現代美術を発信する数少ない画廊としての存在を印象付けた。

日本の画廊は、大きく三つの種類に分けられる。ひとつは、画商が作品を売買するために開く画廊、もうひとつは一定の期間（大抵1,2週間）場所を画家たちなどに貸すいわゆる貸画廊である。前者は画商の理念（それは人によって芸術観であったり経営戦略であったりさまざま）によって画家が選ばれ、個展やグループ展が開かれる。一方後者はそれとは正反対であって、期間を申し込んで決まった金額を支払えば誰でも展覧会を開くことができる。このふたつの画廊の性格の違いはちょうど、審査を受けなければならない団体展と、誰でも自由に出品できるアンデパンダン展に対応するだろう。そして、このふたつの画廊の折衷（とは一概には言えないが）した性格を持った、「貸・企画画廊」が存在する。サトウ画廊はこの第三の画廊だった。戦後日本の現

代美術のばあい、貸画廊と貸・企画画廊という土壌がなければ今日には至らなかった（これは現在でも事情は同じ）。

画材店を母体とした画廊というと、戦後美術について多少の知識をお持ちの方ならば、神田の竹見屋洋画材店が1951年から57年にかけて開いていたタケミヤ画廊を思い出される方も多いと思う。この画廊は作家銚衡を詩人・美術評論家の瀧口修造（1903-79）に依頼し、画家の藤松博によれば「瀧口修造は労力を、竹見屋は場所を、無償で提供することによって、意欲的な個展のための、情実のきかない」画廊として約7年間に201回の展覧会を開催している。画商が経営する画廊とは一線を画し、瀧口というひとりの人間が関わったことによって、タケミヤ画廊の性格は「抽象・具象の別を問わず、現実の空気をなまなましく吸って定着した実験的な作品で作られていった」。運営形態は違っても、佐藤氏と馬場が開いた画廊は事情によって短命に終わってしまったタケミヤ画廊の理念を引き継いだものとも考えることができるだろう。サトウ画廊もまた、「抽象・具象の別を問わない実験的な作品の発表が多かった。

開廊して数年後、1958年度の『美術手帖 臨時増刊 美術年鑑』によればサトウ画廊の壁面は9.5間（約17.271メートル）で料金は1日2,000円（期間は6日）である。これは銀座一帯では最低額の賃料で、当時銀座7丁目にあった村松画廊が、一番小さい部屋（9間）で1日2,500円、銀座西1丁目のなびす画廊が1日3,500円（ただし壁面は13間）だった。

サトウ画廊は二回移転をしており、1966年7月に銀座7丁目に最初の移転を行っている。68年度版の年鑑をみると新しい画廊の壁面は15メートルで料金は1週間の場合30,000円だが、これが2週間になると45,000円である（そして、「画廊企画による」という一項も記載されている）。この場所では71年まで活動し、同年7月に最後の地となった銀座6丁目に画廊は移転した。80年度版の年鑑には、壁面は20メートル、「料金・期間」の欄には「6日100,000円及画廊企画」と記載されている。

画廊の場所は変わりながら、26年間、700名以上の作家たちが作品を発表したサトウ画廊は1981年4月15日、馬場彬の個展によって閉廊した。

（学芸員 藁科英也）



池田龍雄《化物の系譜 ヒロイン》1956年



馬場彬《作品》1958年 いずれも「サトウ画廊コレクション」

サトウ画廊 1955-1981 ～若く、熱い日々～

2006年12月11日（月）—2007年1月14日（日）
10:00—18:00（金曜日・土曜日は20:00まで）

*入場受付は閉館の30分前まで

〔休館日〕	12月29日—1月3日（年末年始）
〔観覧料〕	一般 200（160）円
	高校・大学生 150（120）円
	小・中学生 無料

*「特集展示：草間彌生・荒川修作・篠原有司男」展と共通料金

*（ ）内は団体30人以上の料金

草間彌生・荒川修作・篠原有司男 ニューヨークで活躍した 日本人アーティストたち

1950年代中頃、日本国内で、若い現代アーティストたちが作品を発表できる場は限られていました。第二次世界大戦の傷跡が未だ癒えないこの時期、現代美術の愛好家やコレクターの数は極めて少なく、都内でもタケミヤ画廊やサトウ画廊などごく一部の画廊だけが、団体展からはじき出された前衛的なアーティストを受け入れていました。このように閉塞的な状況のなか、若いアーティストのなかには海外に活路を見出す者たちも現れます。本展で紹介する3人も、パリに代わってアートの中心地となったニューヨークへと惹きつけられていきました。

月並みな言葉で恐縮ですが、草間彌生の半生は、まさにシンデレラストーリーそのものでした。松本の種苗店の娘として生まれた草間は、周囲の反対にもめげず絵の道を志します。地元の公民館で開いた個展にたまたま訪れた信州大学の西丸四方教授の仲介で、1954年東京の美術界に進出。そして早くも1957年にはより大きな可能性を求めて渡米し、直後ニューヨークの一流画廊に見いだされ、展覧会もいきなり大成功を納めます。評論家やマスコミから絶賛され、コーネルやジャッドのようなアメリカを代表する大物アーティストとも交流を深めていったという次第です。この時期生みだされたネット・ペインティングやソフト・スカルプチュアが、誰にも真似できない特異な個性を持つことは広く知られています。その一方で彼女が、ポップ・アートやミニマル・アートへと向かうニューヨーク美術界の流れを的確に捉え、時としてそれら最新の動向の先駆的役割を果たしていたことは見逃されがちです。

草間渡米の3年後、荒川修作と篠原有司男は、東京でネオダダイズム・オルガナイザーズというグループを結成しました。50年代末のニューヨークを席卷した美術動向「ネオダダ」に由来するグループ名から、彼らのアメリカ志向をうかがい知ることができます。荒川は、勝手に個展を開催したというささいな理由からネオダダグループを除名され、その直後の1961年、アメリカへと移り住みました。そして渡米後時を置かずして成功を収め、ダウン・ギャラリーなどの有力画廊で展覧会を開催しただけでなく、70



草間彌生〈幻の青春をあとにして〉1988年

年代にかけて、海外の一流美術館でも個展を開催しました。乳白色の地に図形や文字を描き込んだダイアグラム絵画で、荒川は当時流行していたコンセプチュアル・アートとはひと味違う新境地を開拓したのです。

荒川渡米後の東京で「反芸術」の旗手として活躍していた篠原有司男は、1965年、シカゴのコープリー財団から2000ドルの奨励金を授与されました。「ロバート・ラウシェンバーグへの公開質問会」（1965年、赤坂）に持ち込んだ《思考するマルセル・デュシャン》という作品の写真が、評論家東野芳明の仲介でデュシャン本人の目に留まり、彼が奨励金をもらえるように取りなしてくれたのでした。当時の2000ドルというと、日本円にして72万円。ハガキ1枚5円で出せた時代ですから、かなりの大金です。篠原の目に、アメリカの美術界がいかに豊かで魅力的な場所に映ったことでしょう。ほどなく渡米した篠原は、段ボール製のグロテスクなオートバイ彫刻や、荒々しいタッチとサイケな色彩で描かれた絵画など、いかにもニューヨーク的な作風を確立していきます。

今回採り上げた3人のアーティストは、近年、益々その評価が高まりつつあります。草間彌生は、ニューヨーク近代美術館をはじめとする全米巡回回顧展（1998-99年）で、国際的な一流アーティストとしての地位を不動のものとなりました。荒川修作は、「養老天命反転地」や「三鷹天命反転住宅」などで、アートの世界を超えた多角的な活躍を見せています。数年前、ボカリスウェットのCMで福山雅治と共演し話題を呼んだ篠原有司男も、昨年神奈川県立近代美術館 鎌倉で開かれた回顧展が大きな注目を集めました。

（学芸員 水沼啓和）



荒川修作〈瞬間の内と外〉1966年

篠原有司男〈思考するマルセル・デュシャン〉1965年

特集展示：草間彌生・荒川修作・篠原有司男

2006年12月11日（月）—2007年1月14日（日）

10:00—18:00（金曜日・土曜日は20:00まで）

*入場受付は閉館の30分前まで

〔休館日〕 12月29日—1月3日（年末年始）

〔観覧料〕 一般 200（160）円

高校・大学生 150（120）円

小・中学生 無料

*「サトウ画廊 1955-1981」展と共通料金

*（ ）内は団体30人以上の料金

◎ Wi-CAN ウィーク開催のお知らせ

11/23(木祝) — 12/3(日)

千葉大学の学生が授業の一環として取り組む Wi-CAN プロジェクトは、美術館の大切なアウトリーチ事業でもあります。アウトリーチ事業は、出会うために「待つ」のではなく「出向く」ことを意味します。美術や美術作品は展示室にあるもの、という意識から少し離れて、私たちの暮らすまちや社会の中で、アートの居場所を探ってみましょう。

今年のテーマは「アートの浸透圧」。普段は関わりなく見える日々の生活とアートが、あるいはアートを介することで異なる世界同士が、じわじわと境を越えて、お互いの領域に浸出していくとき、繰り返される静かな衝突の中から何が生まれるのでしょうか。

現代美術作家の岩井成昭さんを迎えてのプロジェクト「^{かた}語リストたちは午後夢をみる」では、期限付きの滞在者として地域に仮住する学生たち9人の、故郷とは異なる「第二の故郷」千葉に対する、少なからぬ葛藤を含んだ想いを通して、逆説的に浮かび上がるこのまちの姿を私たちに投げかけます。

昨年のリノベーションを経て、古い商店から人々の集うアートセンターへと生まれかわった Wi-CANP（中央区栄町）は、学生たちが地元の商店街の方々とともに運営しています。JR 千葉駅からも美術館からも徒歩 10 分の距離にあります。ぜひお立ち寄りください。

会期中、アートセンター Wi-CANP と市美術館、および周辺地域のまちなかを舞台に、様々なアート・イベントを展開します。

(いずれも入場無料、申込不要)

□「^{かた}語リストたちは午後夢をみる」公開

日時：11月23日(木・祝)～12月3日(日)／10:00～18:00

会場：市美術館 1 階ほか

□山口晃 スライドレクチャー & トークセッション

日時：11月26日(日)

13:00～14:30 スライドレクチャー 講師：山口晃(画家)

14:45～16:00 トークセッション

「伝統と現代をつなぐもの 山口晃を手がかりに、その水路を探る」

コーディネーター：神野真吾(千葉大学助教授)

パネラー：山口晃、浅野秀剛(当館学芸課長)

会場：市美術館 11 階講堂

□武井よしみち パフォーマンス & トーク

日時：11月26日(日)／17:00～19:00／会場：市美術館さや堂ホール

□増山麗奈展

日時：11月23、25、26日、12月2、3日／12:00～18:00

会場：Wi-CANP

☆11月23日に会場にて関連イベント(パフォーマンス)あり

■問い合わせ先

千葉アートネットワーク・プロジェクト実行委員会事務局

080-3493-8774／E-mail: mail@wican.org／<http://wican.org/>

または、市美術館まで



Wi-CANP でのイベントの様子



□ 千葉市美術館入場者 100 万人達成！

去る 9 月 13 日、千葉市美術館の入場者が 100 万人を超えました。平成 7 年 11 月 3 日に開館して以来、11 年目での大台達成です。当日は 8 階展覧会場入口前で記念式典が行われ、鶴岡啓一市長より、100 万人目の入場者となった鎌ヶ谷市在住の飯田守和さん裕乃さん夫妻に、記念品が贈呈されました。



□ 展示室で落語—広重土曜寄席大盛況

「広重 二大街道浮世絵展」関連企画として、会期中の毎土曜日 6 時より（9 月 9 日を除く）、広重土曜寄席が開かれました。展示室内に高座を設け、座布団を敷き詰めて落語を行うというかつてないユニークなイベントは、毎回多数の観客で大盛況でした。瀧川鯉昇（9 月 16 日）、三遊亭鳳楽（23 日・写真）、林家彦いち（30 日）、三遊亭歌る多（10 月 7 日）の 4 人が、展覧会のテーマである旅・街道に因んだ噺を披露し、普段静かな展示室が大きな笑い声に包まれました。



市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004 年度より実施しております。

今年度は近世から現代まで、さまざまな時代のアーティストたちについて当館スタッフが毎回わかりやすく解説します。参加は無料です。

□第 6 回 2006 年 11 月 25 日（土）

「柳原義達—はじめの人—」講師：藁科英也（本館学芸員）

□第 7 回 12 月 16 日（土）

「草間彌生—どこまでも広がる網目—」講師：水沼啓和（本館学芸員）

□第 8 回 2007 年 1 月 20 日（土）

「喜多川歌麿—浮世絵美人画の革新—」講師：小林 忠（本館館長）

時 間：午後 2 時から（開場は 30 分前）

場 所：千葉市美術館 11 階講堂

定 員：150 名（入場無料・先着順）



千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

【編集・発行】千葉市美術館

〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8

TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 Japan

<http://www.ccma-net.jp>

【発行日】2006 年 11 月 3 日

【印刷】半七写真印刷工業株式会社

交通案内

◎JR 千葉駅東口より徒歩約 15 分

・千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩 5 分

・バスのりば 7 番より大学病院行、南矢作行にて「中央 3 丁目」

下車徒歩 2 分

◎京成千葉中央駅東口より徒歩約 10 分

◎東京方面から車では京葉道路・東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ 貝塚 IC 下車国道 51 号を千葉市街方面へ約 3km 広小路交差点近く

◎地下に駐車場あり

